

出題傾向と対策

OTEMON
GAKUIN
UNIVERSITY
2025

■ 出題傾向と対策

英 語	06
国 語	07
数 学	09
日 本 史	11
世 界 史	13
政治・経済	15
物 理	16
化 学	18
生 物	19

出題傾向と対策

英語

<全体分析>

	公募制推薦入試	一般入試
試験時間	60分	60分
解答形式	すべて客観式（マークシート方式）	すべて客観式（マークシート方式）
分量・難易度	問題数：大問4、解答マーク数30。量は標準的な分量である。難易度は標準から難。	問題数：大問5、解答マーク数40。長文2題出題されるので、量は少なくない。問題のレベルは標準から難。
大問の構成	〔Ⅰ〕長文読解 〔Ⅱ〕文法・語法の空所補充問題と間違い箇所の指摘問題 〔Ⅲ〕対話文完成 〔Ⅳ〕整序英作文	〔Ⅰ〕長文読解 〔Ⅱ〕長文読解 〔Ⅲ〕文法・語法の空所補充問題と間違い箇所の指摘問題 〔Ⅳ〕対話文完成 〔Ⅴ〕整序英作文

出題傾向・内容分析

●長文読解

〔公募制推薦入試〕

長文は650～850語程度の長さのものが出題されている。主題は様々で、内容は比較的読みやすいものから複雑なものまで幅がある。馴染みのない語彙や表現が出ることがあるが、語句の注は付いていない。設問の選択肢はすべて英語である。設問形式は、約半数が空所補充問題、また、特定の語句の意味や指示語などの内容を問う設問が数問あり、文全体の主旨を問うために、文章の表題を選ばせる問題、内容一致の問題が必ず出題される。

〔一般入試〕

長文読解問題が2題あり、長さは〔Ⅰ〕〔Ⅱ〕ともに600語～1,000語程度と少し幅がある。内容は、ネットや英字新聞などで取り上げられる現代的な話題を扱ったものが多い。原則として難解な語や表現にも注は付かない。公募制推薦入試と同じく設問の選択肢はすべて英語である。〔Ⅰ〕は公募制推薦入試と全く同じ形式の総合問題、〔Ⅱ〕は大きく文脈の理解を問う問題となっている。〔Ⅱ〕の設問は、3箇所の長めの空所に入る英文を選ぶ問題、本文の内容についての英語の質問に対する答えを選ぶ問題が2題、そして文章の表題を選ぶ問題と内容一致の問題となっている。

●文法・語法問題と間違い箇所の指摘

空所補充の文法・語法問題の設問は少なく、4題である。通常の文法・語法問題とは異なり、空所には正解として群前置詞のような3～4語で構成された表現が入り、正解以外の選択肢はすべてその語の並びが間違っているものとなっている。間違い指摘の問題は3題あるいは4題で、それぞれ英文の4箇所に下線を引き、そのどれが文法・語法として間違っているかを問うものである。

●対話文完成

問題は基本8行の対話文からなり、設問の形式はほぼ統一されている。8行のうち3箇所の発言が与えられていて、その他の5箇所が空所になっている。与えられている発言と選択肢の英語から話の流れを推測しながら、空欄を埋め対話全体を完成する問題である。会話の内容は必ずしも単純ではなく、話の流れを正確に把握する必要がある。この形式の問題が公募制推薦入試では1題、一般入試では2題出題されている。

●整序英作文

日本語の意味に合うように語句を並べ替えて英文を完成する問題である。公募制推薦入試は5題、一般入試は4題出題される。並べ替える空所は5箇所である。そのうちの1箇所に入る語（句）の番号を答える。日本語は与えられているが、訳文は直訳とは限らないので、日本語に引きずられることなく、あくまで英語の文として成り立つかどうかを確認する必要がある。

学習アドバイス

●長文読解

英語を読むことを通して、今どのようなことが世の中で話題となっているか知っておくと、新しい文章を読むときそれが力になります。まずは積極的に読む材料を見つける努力をしましょう。過去問や市販のリーディング教材の中にも現代的な話題は見つかります。それに加え、ネットや英字新聞も活用したいものです。英文を読むときには、あらゆるヒントを活用し、文章の主題は何か、そして話の中でその主題がどのように展開されているのかに注意を払いながら、流れや前後関係の中で内容を理解することが大切です。細部にこだわらず、意味を推測しながら先にすすみ、必要に応じて何度でも読み返してください。読解力を身に付けるためには、読む練習をするしかありません。正しい練習を積み重ねることで、必ず力は付いてきます。

●文法・語法に関する空所補充問題と間違い箇所の指摘

良い例文をたくさん集めましょう。文章から自分が何を感じるかが大切です。明確なイメージが伝わる生き生きとした英文を見つけたら、それを貯めていきましょう。抽象的な文法のルールや日本語訳だけに頼っていては、なかなか記憶に残りません。良い英文が見つかったら、その文章が使われる場面などを想像しながら、文の形や言葉の並べ方をしっかり頭に焼き付けましょう。

●対話文完成

様々な会話を聞き、またテキスト化されたものを読んで、話者同士のやり取りに慣れることが必要です。読むときには、漫然と読むのではなく、会話の最初から、一人の発言に対して次に相手がどのように返答するか想像しながら読んでいくと、自然と英語での会話の仕方に慣れていきます。

●整序英作文

整序英作文のコツは決して日本語の理屈で考えないことです。あくまで英語の理屈に沿って考えるようにして下さい。またイディオム的な表現もよく出題されます。自分のレベルに適した整序問題を見つけ、数をこなすことが一番の練習法です。

出題傾向と対策

国語

<全体分析>

	公募制推薦入試	一般入試
試験時間	60分	60分
解答形式	すべて客観式（マークシート方式）	すべて客観式（マークシート方式）
分量・難易度	問題数：大問1問 設問数：標準的な設問数である。 難易度：標準レベル	問題数：大問2問 設問数：比較的多い。 難易度：標準レベル
設問の内容	・漢字の書き取り ・漢字の読みの ・語句の意味 ・傍線部の内容説明 ・傍線部の理由説明 ・傍線部の指示内容 ・空欄補充 ・慣用表現 ・口語文法 ・主語 ・四字熟語 ・脱文補充 ・内容との合致・不一致判定 ・文の整序問題	・漢字の書き取り ・漢字の読みの ・語句の意味 ・傍線部の内容説明 ・傍線部の理由説明 ・傍線部の指示内容 ・空欄補充 ・口語文法、修辭 ・主語 ・慣用表現、四字熟語 ・脱文補充 ・内容との合致・不一致判定 ・段落の内容把握に関する問題 ・文の整序問題

出題傾向・内容分析

●入試問題の概要

現代文のみの出題で、公募制推薦入試は大問1問、一般入試は大問2問である。ただし後者の場合2問と言ってもほとんどが同一出典からの出題で、一続きの長文を甲・乙二つの文章に分けてそれぞれに設問を配してあり、実質的には1問とみなすこともできる。この大学特有の出題方式なので、慣れるために過去問で十分に練習しておく必要がある。設問はすべて客観式（マークシート方式）である。漢字の書き取り・読み、語句の意味、口語文法、空欄補充、文の整序、内容・理由説明、内容合致などの一般的な形式の設問がまんべんなく出題されている。難易度は標準レベルと言えるが、文章量・設問数ともにボリュームがあるので、時間配分への配慮がいる。

●出題文章の傾向

受験生にとって取り組みやすく、具体的で親しみやすい文章が選ばれている。抽象概念が多用されるような哲学的な文章からの出題はない。

総じて標準的な文章と言えるが、前述したようにボリュームがある（特に一般入試）。社会・経済・歴史・文学・芸術、自然科学系統の評論が中心で、時に随筆的な性格を持つ文章の出題もある。また、翻訳文や翻訳小説の出題もあるので、留意しておきたいが、特別な対策が必要というわけではない。

●設問の意図

すべての問題は選択式である。全体として、出題文そのものの読み取りに重点を置いている。以下、設問形式ごとの出題意図を概説する。

漢字の読み書きに関する問題は、いずれも常用漢字の範囲内に限定し、日常の学習態度を問うようにしている。

空欄補充問題は、接続詞・副詞を中心として文章の論理構造が読み取れるかどうかを問うものと、慣用句の知識を問うものに大別される。いずれも高校レベルの、難度の高くないものを選んで出題している。

語彙に関する問題は、高校までの課程で学ぶ標準的なレベルの抽象語、外来語、慣用句を基本とする。さらに、難度が高めの語彙についても、前後の文脈から意味を絞ることが可能な場合に、出題することがある。これも、読み取りの能力を求めるためである。

文の整序問題も、文脈把握の的確性を問う趣旨で用意している。

説明問題は、文中の表現の意味や理由などが、文脈の中で正しく把握できているかどうか問うものである。高校の標準的レベルの文章読解力をもって丁寧に読み込めば、正解にいたることができるようにしている。

最後に、まとめとしての問題を出題し、趣旨や全体の流れが把握できているかどうかを問うている。

学習アドバイス

●読解力の養成

現代文の実力は短期間に身につくものではない。着実に一步一步進むという姿勢で臨みたい。短時間のうちに文章の内容を的確に把握することが目標であるが、まずはあわてずに精読を心がけよう。時間を気にせずじっくりと文章を読みながら、自分の理解し難いことが何であるのかを自覚する必要がある。それが単に語意のレベルなら、国語辞典を引けばよい。未知の話題についていけないということなら、百科事典やその分野の入門書も活用したい。今は、ネットで検索することで、比較的容易に知識を得られるので、そうした方法も活用したい。文章そのものの論理展開が難解に感じられるなら、これは焦らずに色々な文章に接して慣れるしかない。そのためには高校の現代文テキストや問題集を積極的に活用すればよい。

●辞書・キーワード集の活用

豊富な語彙力が文章読解の基礎にあることは言うまでもない。言葉を知らずに文意の理解や要旨の把握などできるはずはない。その場合の言葉とは、日常会話やメールで使う言葉とイコールではない。中心となるのは、評論文で頻繁に目にする抽象語である。このような言葉は日常語のように自然に身につくものではなく、意識して努力しなければ身につかない。分からないと思ったらすぐに国語辞典を引くことである。今は電子辞書もあれば、インターネットの辞書もある。それほど手間のかかる作業ではないはずだ。また、評論文キーワード集も数多く出版されている。こうしたものも積極的に活用したい。重要語を効率よく理解・習得できるように工夫されている。ただし、語句の意味はただ暗記しても、ほとんど役に立たない。その語句が使われている文脈の中での用法を理解しなければ意味がない。例えば、「相対・絶対」、「普遍・特殊」といった対義語それぞれの意味などは、評論文の中で何についての対比を表現しているのかを理解しなければならない。

●読書習慣と普段の学習

入試現代文では、大学での学習、研究に必要な文章読解力が身についているか否かが試される。そうした読解力を習得するために最も有効な方法は、読書の習慣を身につけることである。まず読解力を獲得してから読書するのではない。読解力は読書を続けるうちに自ずと身につくものである。読書を苦にしない人間には自明のことだ。しかし、新書や文庫本さえ分厚そうに感じて、手に取るのもおっくうな受験生も多いだろう。そうした受験生の読書の入り口が高校の現代文テキストなのである。そこに収録されている様々な内容、様々な文体の日本語の文章は厳選された良質なものである。高校三年間で使用する現代文テキストに収録されている評論のすべてが授業で扱われるわけではない。授業で扱われなかったものも含めて、現代文テキストに収録されているすべての評論を、もう一度通読・精読してみるとよい。興味を感じる文章がきっと見つかるはずだ。それが読書の範囲を広げていくきっかけにきっとなるに違いない。

●過去問を解く

出題傾向・内容分析で見たように、出典内容は多岐にわたり、文章も決して短くはない。限られた時間内で内容を的確に把握し、かなりの量の設問に適切に対応するためには、過去問を使った実践的な演習は欠かせない。60分という目安を立てて、時間内に全問解ける実力を身につけよう。さらに、標準レベルで選択式の市販の問題集も利用して、多様な分野の文章を読み、多様な設問形式に挑戦しておけば、入試本番で戸惑うことはあるまい。

出題傾向と対策

数 学

<全体分析>

試験時間	60分
解答形式	すべて客観式（マークシート方式）
分量・難易度	分量：適当 難易度：基本から標準
大問の構成	公募制推薦入試（前期・後期） 〔1〕 場合の数と確率 〔2〕 数Ⅰ・数Aからの小問集合 〔3〕 図形と計量 〔4〕 数Ⅱからの小問集合 〔5〕 数B（数列）または数C（ベクトル） 〔6〕 数Ⅲ・数C（平面上の図形と複素数平面）からの小問集合 上記6問のうち3問を解答する。 一般入試（前期・後期） 〔1〕 数Ⅰ・数Aからの小問集合 〔2〕 場合の数と確率 〔3〕 数Ⅱ・数B（数列）・数C（ベクトル）からの小問集合 〔4〕 数B（数列）または数C（ベクトル） 〔5〕 数Ⅲ・数C（平面上の曲線と複素数平面）からの小問集合 上記5問のうち4問を解答する。

出題傾向・内容分析

公募制推薦入試（前期・後期）

●出題範囲

理工学部以外： ①数Ⅰ、数A ②数Ⅰ、数Ⅱ、数A から選択
理 工 学 部： ③数Ⅰ、数Ⅱ、数A、数B（数列）、数C（ベクトル）
④数Ⅰ、数Ⅱ、数Ⅲ（積分法除く）、数A、数B（数列）、数C（ベクトル） から選択

●出題傾向

場合の数と確率は全学部必答で、一つの試行で起こりうる様々な事象を取り上げ、基本的な考え方を理解し正しく確率が計算できるかどうかをみる内容になっている。

また、できるだけ広い分野に対する基礎力の有無を見るための小問集合、および思考力や応用力を見るための一つのテーマに沿って展開される問題で構成されている。

教科書の例題や章末問題が確実に解けるようにしておけば対応できるだろう。

●出題内容

数Ⅰ

無理数の整数部分と小数部分、和集合と積集合、必要条件と十分条件、1次不等式、放物線の平行移動とx軸との位置関係、2次関数の最大値・最小値、2次方程式と判別式、データの平均値と分散、余弦・正弦定理、面積と内接円の半径、四面体の体積

数A

和事象と積事象および余事象の確率、独立・反復事象の確率、条件付き確率

数Ⅱ

恒等式、2つの円が接する条件、 $\sin\theta$ と $\cos\theta$ の対称式、三角関数の2倍角の公式と合成、指数方程式と不等式、3次曲線の接線、3次関数の最大値・最小値、絶対値を含む定積分の計算、定積分で表された関数の決定

数B

等差数列および等比数列の一般項と和

数C

2直線の交点の位置ベクトル、ベクトルの内積と絶対値

数Ⅲ

逆関数、分数関数のグラフの漸近線、極限值、対数微分法、第3次導関数、曲線の接線と法線、曲線の変曲点、関数の極値

一般入試（前期・後期）

●出題範囲

理工学部以外： 数Ⅰ、数Ⅱ、数A、数B（数列）、数C（ベクトル）
理 工 学 部： ①数Ⅰ、数Ⅱ、数A、数B（数列）、数C（ベクトル）
②数Ⅰ、数Ⅱ、数Ⅲ、数A、数B（数列）、数C（ベクトル、平面上の曲線と複素数平面） から選択

●出題傾向

幅広い分野にわたって、基礎の理解と教科書の章末問題のレベルに対応できるかどうかを小問集合で判定できるようになっている。さらに2つの大問では、1つのテーマに沿って難易度に変化を持たせた内容にすることによって、思考力や応用力の程度も見ることができるようになっている。

出題傾向と対策

数 学

●出題内容

数 I

式の値、絶対値を含む方程式と不等式、必要条件と十分条件、和集合と積集合、2 次方程式の解の判別と共通解、2 次関数の最大値・最小値、円に内接する四角形、四面体の体積

数 A

和事象と積事象および余事象の確率、独立・反復事象の確率、条件付き確率

数 II

解と係数の関係、相加平均と相乗平均、2 つの円が 2 点で交わるための条件、三角関数の 2 倍角の公式、対数不等式、整数の桁数と最高位の数字、3 次関数の極小値と 3 次方程式の解の個数、3 次曲線の接線と面積、定積分で表された関数

数 B

等差数列と等比数列の一般項、およびこれらの積から成る数列の和、漸化式で与えられた階差数列、分数数列の和、連立型の漸化式

数 C

2 直線の交点の位置ベクトル、内積と 2 直線の垂直条件、楕円の焦点と縮小、極座標、複素数の極形式、複素数平面上での回転

数 III

数列の極限、曲線の変曲点と接線、分数関数と対数関数の定積分、面積と回転体の体積

学習アドバイス

公募制推薦入試・一般入試のどの日程においても、異なる分野から選ばれた小問の集合によって基礎力の有無を、そして特定の分野から選ばれた重要なテーマを中心に据えた一連の問題によって応用力の程度を見る、という構成になっている。

全体として広い範囲から出題されているので、不得意な分野を作らないことが必要である。また、出題内容とその難易度から考えると、教科書の例題を確実に解けるようにした上で、章末問題を利用して各分野の重要なテーマを取り上げた典型的な問題は十分に練習しておくといだろう。普段の学習は、次の点に留意して行うと効果的である。

教科書で理論を系統的に理解する

定義、定理、公式についての説明や導出を飛ばさずに読むと、それぞれの分野で習得すべき数学的な考え方が分かるようになる。式を表面的に暗記するだけではそれによって表される数学的な意味が頭に入らず、単に当てはめることで結果が得られる問題にしか対応できない。状況に応じて定理や公式を的確に使いこなせるようにしておくことが、合格のための条件である。

問題を解くという経験を積む

実際に定理や公式を様々な状況で使う演習を行うことにより、理解が深まり思考力や応用力も磨かれる。経験を積むほど、初見の問題であっても解法の手掛かりを見つけていくことが容易になるのである。

特に確率や図形の問題では、式変形が主ではなく、与えられた状況に対してどの基礎的な考え方が使えるのかを判断することが重要である。従って、教科書の問題をマスターした後、標準レベルの問題集で入試頻出の問題を中心に解いておくといだろう。

実際の試験は解答時間に制限があり、解答形式も様々である。普段は、自分の考えを確認しながら解き進めることができ、後で振り返ることもできる記述式の解答作成がよい。また、試験の準備がある程度進んだら、過去の問題に挑戦してみて所要時間から学習の到達度を知り、以後の学習に役立てるといだろう。

出題傾向と対策

日本史

<全体分析>

	一般入試
試験時間	60分
解答形式	すべて客観式（マークシート方式）
分量・難易度	分量：大問3問 小問（解答数）はいずれも合計40問 難易度：標準～やや易
大問の構成	一般入試前期日程（1月23日）：大問3問でリード文は計13及び史料文2 ・空欄の補充および下線部に関する語句の選択問題が中心 ・日本地図（都道府県の区分あり）を用いた設問は4問、ほか美術作品の写真（1点）、明治期の北海道・千島列島・樺太の地図（1点） ・史料はA・B2種類、下線部に関連する語句、史料全体についての説明文（正文）や人物を選択、空欄に補充する語句を選択 ・正文または誤文を選択する問題は3問 一般入試前期日程（1月24日）：大問3問でリード文は計13及び史料文2 ・空欄の補充および下線部に関する語句の選択問題 ・複数の空欄に該当する語句の正しい組み合わせを選ぶ問題は3問 ・日本地図（都道府県の区分あり）を用いた問題は3問、ほか美術作品の写真（1点） ・史料は、A・B2種類（Aは短い史料を2つ引用、Bは1つ）、史料全体についての説明文（誤文）を選択、下線部に関する語句・説明（正文）選択 ・正文または誤文を選択する問題の数は12問 ・リード文に施された4つの下線部のうち誤りの箇所を選ぶ問題（1問） 一般入試前期日程（2月3日）：大問3問でリード文は計13及び史料文2 ・空欄の補充および下線部に関する語句の選択問題 ・複数の空欄に該当する語句・記号の正しい組み合わせを選ぶ問題は4問 ・日本地図（都道府県の区分あり）を用いた問題は5問、鎌倉時代の訴訟制度の図（1問）、日本人の引揚げ人数の資料（1問）、※絵図・写真は無し ・史料はA・B2種類、史料全体についての説明文（正文）選択、史料から読み取れる時代選択、史料と関係する出来事選択、空欄・下線部に関する語句選択 ・正文または誤文を選択する問題は8問 ・リード文に施された4つの下線部のうち誤りの箇所を選ぶ問題（2問）

出題傾向・内容分析

●出題傾向

解答方式は、すべてマークシート方式で、語句の記述や論述の問題はない。

大問の構成は3問。大問それぞれにはリード文と史料文がつく。出題形式は、リード文中の空欄補充と下線部に関する語句選択が多いが、下線部に関する正文（or 誤文）の選択や、適当な語句の正しい組み合わせを答える複合解答問題も出題される。

解答数は各日程ともに40で、時間的には60分で十分に余裕があるだろう。難易度は、教科書に紹介される基本語句（太字部分）を中心とした出題となっており、全体として「標準よりやや易」である。

●出題内容

2025年度は、3日程のすべてで原始～古墳時代に関する出題がなされ、加えて古代から戦後の1980年代まで出題された。

分野では、政治を中心に、外交・文化・社会経済の分野からおおむねバランス良く出題されているが、1月23日実施分では文化史分野の出題が比較的多く見られた。

史料問題は、3日程とも大問Ⅱで必ず出題されている。史料文は教科書や副教材である史料集に紹介されているものだけでなく、受験生には初見となる史料文もある。ただし、設問文には史料を読み解くヒントが示されているため、解答に窮することはほとんどない。

1月23日、1月24日、2月3日のすべての日程の大問Ⅰで、都道府県の境界を示した全国地図を用いた問題が出題され、この傾向は例年通りである。また、写真や図・史料を用いた設問も各日程で見られたが、例年よりやや少なめであった。

●出題の特徴

本学入試の特徴は、独立した数行のリード文が数多く出され、テーマも多様なことである。2020年度以降では、すべての日程で大問が3問となり、全国地図を用いて歴史項目の場所を問う問題は必出となり、2025年度入試においても継続している。

1月23日実施分〔Ⅰ〕では、リード文が7つ、〔Ⅱ〕では史料文（A『吾妻鏡』より守護・地頭の設置、B『官報』より国体明徴声明）、〔Ⅲ〕はリード文6つで構成されている。史料問題はA、Bそれぞれの史料につき3問ずつの配分である。正文（誤文）を1つ選択する文選択の問題は3問出題され、本年度の3日程では最少となった。

1月24日実施分〔Ⅰ〕はリード文が9つ、〔Ⅱ〕は史料文（A『蔭涼軒日録』・『実悟記拾遺』より加賀の一向一揆、B『政友』より明治後期の政治）からなる史料問題、〔Ⅲ〕はリード文4つからなる。〔Ⅱ〕はA、B各史料につき設問は3問ずつであった。正文（誤文）を1つ選択する文選択の問題は全体で12問であった。

2月3日実施分では、〔Ⅰ〕はリード文が8つ、〔Ⅱ〕は史料文（A『庭訓往来』より鎌倉時代の商工業、B『日本外交年表並主要文書』より第三次日韓協約）、〔Ⅲ〕はリード文5つからなる。正文（誤文）を1つ選択する文選択肢の問題は全体で8問出題されていた。

以上、2025年度入試の各日程をまとめると、リード文は3行から十数行という記述量の幅があるが、いずれも教科書や副教材の史料集に準拠した平易な文章で、受験生にとっては取り組みやすいと思われる。

史料文は各日程の〔Ⅱ〕で出題される。受験生には未見の史料が出題されることもあるが、史料文中や設問文に必ずヒントとなる語句や説明があるので、これらを見逃さなければ正解できる。

学習アドバイス

●教科書の通読を

問題はほとんどが高校教科書の記述のうち太字で書かれた基本事項を中心に出题されており、受験生にとって見慣れない語句が含まれる設問であっても、リード文や他の選択肢を比較することで正解にたどり着くことができるため、難問はないとみてよい。時代・分野にかたよりはなく、まんべんなく出題されているので、まず教科書の本文を中心に歴史の流れを理解するように心がけよう。戦後史も2025年度入試では1980年代まで出題されており、教科書の全範囲の学習を終えておく必要がある。ただし、教科書本文だけではなく、教科書に掲載されている写真・図・グラフ・史料にも注意が必要である。特に2月3日実施分では鎌倉時代の訴訟制度の図が出题され、単なる語句の暗記だけではなく、その仕組みを理解していることも求められており、次年度においても類似の出题が予想される。解答方式はマークシート方式であるが、重要語句は自分で書いて覚えるようにしよう。また、音読も記憶の定着に効果的である。

●史料・地図問題への対策

どの日程でも史料問題が必ず出題されており、教科書に掲載されているような有名な史料ではヒントなしで史料の空欄補充が求められる場合もある。高得点をのぞむのであれば、頻出史料の熟読が必要である。まず高校教科書に紹介される史料を、ついで山川出版社の『詳説 日本史史料集』などを用いて、しっかりと学習をしておこう。地図問題は地方で起きた事件や各地の文化財について、その地域が属する都道府県を特定する形で答えさせる場合が多い。教科書を見ると地図が掲載されているページも多く、それぞれの地図を教科書本文とともに注意深く見ておこう。地図に関しては教科書のほか、副教材の図説（図版）にも多く掲載されているので活用しよう。

●過去問にチャレンジを

次に、基礎力を問う問題集を選び、基本語句を何度も確認し、その上で本大学の過去問に目を通すということが最善の対策である。過去問を自分自身で解いてみることで、入試傾向をつかむことが出来るし、また、自分の学習到達度を確認することが出来る。本学の過去入試問題集は教学社の赤本シリーズにあるので、これを活用することをお勧めする。

出題傾向と対策

世界史

<全体分析>

	一般入試
試験時間	60分
解答形式	すべて客観式（マークシート方式）
分量・難易度	分量：大問3題 小問総数40問 単答問題が多い（平均17問）ので量的にはやや少ない 難易度：標準からやや易
大問の構成	一般入試前期日程（1月23日） 〔Ⅰ〕ヴィルヘルム2世に関するリード文を引用し、西洋史やオスマン帝国などを問う問題。 〔Ⅱ〕中国の神話に関するリード文を引用し、中国史を問う問題。1問は朝鮮史。 〔Ⅲ〕リード文なし 南アジア史・東南アジア史、西洋近代史を問う問題。 小問総数40問のうち、人名・語句などを選ばせる単答問題が23問、4つの文の正誤判定問題は15問、年代整序問題は2問。 一般入試前期日程（1月24日） 〔Ⅰ〕神聖ローマ帝国に関するリード文を引用し、西洋近代史を問う問題。古代ギリシアが1問、現代史が1問、イスラム史が1問。 〔Ⅱ〕日本人のアジア認識に関するリード文を引用し、近現代史を問う問題。 〔Ⅲ〕リード文なし 現代史を問う問題。 小問総数40問のうち、人名・語句などを選ばせる単答問題が15問、4つの文の正誤判定問題が19問、年代整序問題は6問。 一般入試前期日程（2月3日） 〔Ⅰ〕ウィーン体制から第一次世界大戦勃発までのリード文を引用し、近現代史を問う問題。 〔Ⅱ〕イギリス史の年表を掲げて、13～19世紀のイギリス史を問う問題。 〔Ⅲ〕リード文なし 古代ギリシア・ローマ史、古代アジア史、清朝、満洲事変後、アジア・アフリカの独立などの問題。 小問総数40問のうち、人名・語句などを選ばせる単答問題が14問、4つの文の正誤判定問題が18問、2つの文の正誤判定問題は5問、年代整序問題は3問。

出題傾向・内容分析

●出題形式は

人名・国名・地名・用語などを選ばせる単答問題、4つの文の正誤判定問題、年代整序問題などが出題されている。2つの文の正誤判定問題は、1日程のみで出題された。

●地域的には

地域間の比較では、欧米史とアジア史を比較すると、やや欧米史が多かった。ただし、1月23日は欧米史が17問とやや少なく、1月24日、2月3日は欧米史が25問とやや多い。年度や日程によっては地域的に大きく偏ることもあるので、注意が必要である。過去には受験生が苦手とする東南アジア史からかなり多く出題された年度もあった。

●時代的には

古代から20世紀末まで幅広く出題されているが、年度・日程によって偏りが見られる。本年度は1月24日は西洋の古代史と中世史が計3問と少なく、近代史が3問・現代史が7問と合計37問となっており、近現代史で9割以上を占めていた。特に現代史は未消化なまま受験する人も多いと思われるので、注意する必要がある。

●難易度は

本年度もやや難しい問題があったが、全体としてはほぼ教科書に準拠した問題で、難問・奇問はなく、標準的である。単答問題が比較的多いので、時間的な余裕もあると思う。問題による難易のバラツキがあるので、易しい問題を先に片づけるようにするとよい。現代史、イスラム史、東南アジア史からの問題は、特に意識的にしっかりと教科書を学習して、自信をもって試験に臨むようにしたい。

学習アドバイス

●教科書中心の学習を

やや細かい事項を問う問題が一部にあるが、ほとんどは標準的な問題なので、分厚い参考書などを通読する必要はなく、教科書中心の学習で十分に合格点に達することができる。教科書の範囲の知識を身につけた上で、用語集・図録・問題集などを利用して補充をすればよい。ただし、正文・誤文を選択する問題も出題されるので、単に用語を暗記するだけでなく、その内容を理解することを心がけたい。例えば、ある事件に関して、その起きた背景、事件の内容、その事件がもたらした影響などを、しっかりとまとめておくこと。

●やり残した時代・地域・分野のないように

大問が3つのみなので、日程ごとに見ると出題される時代や地域には偏りがある。しかし、全日程を通して見れば、時代・地域・分野ともに幅広く出題されている。「勉強し残した時代や地域が、集中的に出題された」というようなことがないように注意しておきたい。また、日程によって「当り外れ」がないように、まんべんなく教科書に目を通しておく必要がある。政治史だけではなく、経済史や文化史も確認しておきたい。

時代では、第二次世界大戦（1939～45）後まで出題されるので、冷戦時代をやり残さないように注意しておきたい。欧米史では、冷戦・西欧の統合・戦後のアメリカ大統領などを、アジア史ではアジア諸国の独立・戦後の中国・パレスチナ問題などを理解しておこう。

世界史

地域では、東南アジア史・朝鮮史・イスラーム史・アフリカ史などをやり残していると、大きく失点する可能性があるので、こうした地域は通史的に整理しておきたい。

●地理的な知識を身につけよう

年度によっては地図を使った問題が出題されることもあり、また地図を使用していなくても、地理的な知識がないと解答が難しい問題も出題される。最低限、教科書に記載されている地図はよく見て、ポイントをつかんでおく必要がある。ヨーロッパの主要都市・中国歴代王朝の都の位置などは、白地図などに書き込んでみるとともに、河川との位置関係をつかんでおこう。

●時代の把握をしっかりと

数は少ないが、時期や年代そのものを問う問題や、時代順に事項を並べさせる年代整序問題も出題される。歴史用語を覚えていても、それがいったい「いつ」のことなのか把握できていないことのないようにしよう。重要な歴史的イベントが「何世紀」の出来事であるのか、特に重要な歴史的イベントが「何年」の出来事であるのか、しっかりと確認しておきたい。

●過去問を利用する

過去問を解くことによって、本学の出題形式に慣れるとともに、出題の傾向をつかむことができる。自分の受験する日程以外の問題にも必ず当たっておこう。

出題傾向と対策

政治・経済

<全体分析>

	一般入試
試験時間	60分
解答形式	すべて客観式（マークシート方式）
分量・難易度	大問3題、解答（マーク）数50問。 分量は適当。 難易度は、例年通り、教科書レベルの標準的な問題がほとんどであるが、わずかながら、詳細な知識を要する問題もある。しかし、教科書をしっかり学習すれば、合格点には十分到達することができる。
大問の構成	一般入試前期日程（1月23日） 〔Ⅰ〕戦後世界と日本（語句選択・短文選択・組み合わせ問題） 〔Ⅱ〕戦後日本経済の復興（語句選択・短文選択・組み合わせ問題） 〔Ⅲ〕少子高齢化とその対策（語句選択・短文選択・組み合わせ問題） 一般入試前期日程（1月24日） 〔Ⅰ〕国家と世界（語句選択・短文選択・組み合わせ問題） 〔Ⅱ〕経済競争とその制限（語句選択・短文選択・組み合わせ問題） 〔Ⅲ〕少子高齢化社会とその対策（語句選択・短文選択問題） 一般入試前期日程（2月3日） 〔Ⅰ〕55年体制とその後の政治（語句選択・短文選択問題） 〔Ⅱ〕日本の財政（語句選択・短文選択問題） 〔Ⅲ〕日本と世界のさまざまな問題（語句選択・短文選択問題）

出題傾向・内容分析

●出題傾向

大問3題、解答（マーク）数50問、試験時間60分は例年通りで変わっていない。解答方式も全問マークシート方式の四肢択一問題である。1月23日日程では短文選択問題が中心で半分以上を占め、4割程度が語句選択問題で、他に年代の語句組み合わせ問題や事項の組み合わせ問題などで構成されている。1月24日日程では語句選択問題が6割以上を、短文選択問題が3割ほどを占め、他に年代の短文組み合わせ問題や語句組み合わせの問題で構成されている。2月3日日程では短文選択問題が半分以上を占め、語句選択問題も半分近くで構成されている。

●出題内容

各日程の出題内容は<全体分析>の通りである。2025年度入試は、1月23日・1月24日・2月3日の日程で、政治・経済・国民生活・国際の各分野から出題されている。全日程を通してバランスのとれた構成と思われる。政治・経済分野はもちろん、国際問題や社会保障・労働問題、地球環境・農業問題・消費者問題なども出題されており、ほぼすべての分野から出題されている。

●出題の特徴

全体的には教科書の内容に準拠した標準的な問題がほとんどであるが、1月23日日程で難しい問題もあった。〔Ⅰ〕問8（解答番号15）の国連貿易開発会議に関連する設問は、正解となる選択肢②は問題ないものの、選択肢①ではMDGsの目標が、「貧困の撲滅（これはSDGsの目標）」ではなく「極度の貧困と飢餓の撲滅」であることや、選択肢③はドーハ・ラウンドが「2008年に合意断念」ではなく「2011年に交渉の休止宣言」であること、選択肢④は人間開発指数が「南北問題とは直接的には関係」がなく「先進国を判定するための基準としての役割としてつくられた」となり、それぞれの誤りの判断は、いずれも細かい知識を問うており、難しい。

〔Ⅰ〕問9（解答番号16）の選択肢④は「日本のひもつき援助の割合が低くなった」で正解であるが、それは極めて最近のことであり、また教科書などには「贈与の比率は低い」などの記載があるため、これを正解とするのはやや難しい。

〔Ⅱ〕問3（解答番号23）は「敗戦によって落ち込んだ」に関する設問であるが、誤りとされる選択肢はいずれも細かい知識を問うもので、選択肢①は「敗戦翌年の鉱工業生産指数は戦前の2割程度まで落ち込んだ」、選択肢②は「第二次世界大戦で国富の4分の1を失った」、選択肢③「第二次世界大戦で実質GDPは戦前の半分程度まで落ち込んだ」を知っておかなければならず、難しい。

ただし、これらの問題が解けなくても、多くを占める標準的な問題を確実に正答すれば、十分に高得点が目指せる内容である。

学習アドバイス

●教科書の内容を徹底的に理解しよう

政治・経済・国際関係・国民生活の各分野から出題される可能性があるため、すべての分野を学習する必要がある。また、教科書に準拠した標準的な問題が多く出題されるので、まずは教科書のすべての内容をしっかりと理解するようにしよう。そして、学習する際には、教科書の重要語句をただ暗記するだけではなく、その前後の文脈も理解しながら学習しよう。また、教科書の欄外に示されている語句や地図なども問われることがあるので、見落とさずに学習しておこう。さらに今年度入試では出題されなかったが、過去に出題されたことがある計算問題や図表の読み取り問題にも対処できる学習も必要である。

●用語集や資料集を利用しよう

教科書を学習していてわからない用語や難解な用語が出てきたら、すぐに調べられるように用語集を用意しておくことと便利である。用語集には、『政治・経済用語集』（山川出版社）や『用語集 政治・経済』（清水書院）などがある。また、教科書で学習した事柄について理解を深めるために、資料集なども積極的に活用してほしい。

●問題集や過去問を解こう

知識を定着させるために、多くの演習問題を解いてほしい。教科書の内容を確認できる基礎的な問題集がよいだろう。また、本学の過去問題を解くことで実力を試すことができるとともに、傾向もしっかりとつかむことができる。

出題傾向と対策

物 理

＜全体分析＞ ※ 1月24日の問題については分析を記載していません。

	一般入試
試験時間	60分
解答形式	すべて客観式（マークシート方式）
分量・難易度	分量：やや少なめ 難易度：基本から標準
大問の構成	一般入試前期日程（1月23日・2月3日） 〔1〕小問集合（設問数5） 〔2〕力学（設問数5） 〔3〕電磁気（設問数5） 〔4〕波動（設問数5）

出題傾向・内容分析

一般入試（前期）

●出題範囲

物理基礎・物理

●出題傾向

限られた時間内に問題を素早く解くためのスピードや、厄介な計算をやり抜くためのパワーが求められる入試問題ではない。問題の難易度は、教科書の例題から章末問題までのレベルと言ってよい。試験時間は十分に与えられているから、標準的な学力を身につけることができれば、十分良い結果が得られるだろう。上記の＜全体分析＞が示すように、「熱と気体」の分野は大問としては出題されていないが、小問集合の中では両日程で出題されている。本学志望の受験生にとっては、各分野からの偏りのない出題に対応し、分野を限定せずに幅広く準備を行っておくことが何よりも大切と思われる。

●出題内容

《前期1月23日》

* 物理基礎

【力学】滑車にかけた糸につけられた二物体の運動、摩擦力

【波動】音のうなり

【電気】消費電力

* 物理

【力学】第二宇宙速度、剛体のつりあい

【熱と気体】理想気体の等温変化

【波動】楔形の隙間による光の干渉

【電気と磁気】抵抗とコンデンサーからなる直流回路、コンデンサーの電気量と電場、電流が作る磁場、電流が磁場から受ける力

《前期2月3日》

* 物理基礎

【力学】等加速度直線運動と $v-t$ グラフ、浮力、摩擦のある斜面を上る物体の運動、仕事

【熱】比熱と潜熱

【波動】波の重ね合わせ

【電気】抵抗の直列・並列接続

* 物理

【力学】放物運動

【波動】音のドップラー効果、直接音と反射音による音のうなり

【電気と磁気】ローレンツ力を受ける荷電粒子の運動、電場と磁場の中での荷電粒子の等速直線運動

学習アドバイス

受験の準備をするには、物理という科目の特徴に十分注意することが大切である。その特徴とは何か。それは、物理が理科の中では最も多く数学を利用する科目だということである。なぜか。自然界で起きる多くの現象は数学を使うと不思議なほどうまく表現でき、加えて、数学自体がもつ力（例えば方程式の解法など）が、自然現象を理解したり予測したりすることを驚くほど強く手助けしてくれるからである。

実際に、物理の問題を解くときのことを思い出してみよう。

- ① まず、問題文を読み、どのような状況でどのような現象が起き、何が問われているのかを理解する
- ② そこでの自然現象がどのような自然法則や考え方に支配されるのか見当をつける
- ③ 見当をつけた法則や考え方を、与えられた問題の状況に合う数学的な表現（方程式など）に書き表す
- ④ 最後に、その数学的な表現を様々な計算技術（数学の力）の助けを借りて解きほぐし答えを得る

いつも、このような作業を行っているのではないだろうか。

以上のことから、物理の問題を解くために大切なことは、これらの作業をスムーズかつ正確に実行できるようにすることだと言える。日々の学習の中でそのカギを握るポイントは、次の二つであると思われる。これは、どのような教材（教科書、参考書、問題集など）の学習においても変わらないだろう。

物 理

第1のポイント

①～③のためには、抽象的な物理の法則や考え方の習得が必要不可欠であるが、その習得には、各教材の例題につけられた解答例や解説を熟読し、その内容を具体的に理解し吸収することが最も効果的である。これにより、典型的な場面で、適切な数学的表現をどのように導けばよいのかを、実感を持って学ぶことができる。たとえ短い例題であっても、それは学ぶ者にとって貴重な経験となる。このようにして得られた理解は、確実な知識として定着し、やがて本番で大きな力を発揮するものとなる。

第2のポイント

最後の④は、正解を得るには避けて通れない作業である。これを適当な時間内で正確にやり遂げる力をつけるには、各教材の標準レベルの練習問題に真剣に取り組み、そこで生じた誤答の原因や自分の弱点をはっきりと意識し、入試に対応した計算技術を磨いていくことが大切である。例えば、練習で計算を急ぐあまり誤りが多発するようなら、スピードよりも正確さを優先させるよう意識を変えてはどうだろうか。本学の入試物理では、「出題傾向」の通り、計算のスピードはさほど要求されてはいないのだから。

伝えたいアドバイスは以上である。これがヒントとなって、良い結果に繋がることを期待する。

出題傾向と対策

化学

＜全体分析＞ ※ 1月24日の問題については分析を記載していません。

	一般入試
試験時間	60分
解答形式	すべて客観式（マークシート方式）
分量・難易度	分量：適当 難易度：基本から標準
大問の構成	一般入試前期日程（1月23日） 〔1〕小問集合 〔2〕酸塩基と中和反応、反応速度 〔3〕無機化学（ハロゲン元素、1族・2族元素） 〔4〕有機化学（ $C_4H_{10}O$ で表される化合物、サリチル酸とその誘導体） 一般入試前期日程（2月3日） 〔1〕小問集合 〔2〕酸化還元、化学平衡 〔3〕無機化学（硫酸の性質、両性元素・金属のイオン分析など） 〔4〕有機化学（カルボン酸、アニリンとその誘導体）

出題傾向・内容分析

一般入試（前期）

●出題範囲

化学基礎、化学

●出題傾向

基礎的なことを十分に理解し、教科書レベルの知識を幅広く問う内容になっている。大問1は化学全範囲から幅広く出題された小問集合、その他の大問はそれぞれ、理論化学、無機化学、有機化学の分野から、それぞれ二つ程度のテーマの下で基礎的な知識や理解を問う問題から構成されている。

●出題内容

* 理論化学

酸塩基と中和反応、酸化還元、反応速度、化学平衡

（小問集合）純物質と混合物、同位体、原子構造、化学結合、固体の溶解度、中和反応、ボイル・シャルルの法則、コロイドの性質、溶解度積

* 無機化学

ハロゲン元素、1族・2族元素、硫酸の性質、両性元素・金属のイオン分析

（小問集合）リンの性質

* 有機化学

$C_4H_{10}O$ で表される化合物、カルボン酸、サリチル酸とその誘導体、アニリンとその誘導体

（小問集合）アルコールの異性体、フェノールの性質

* 高分子化学

大問としては扱われていません。

（小問集合）二糖の構造、アミノ酸の異性体

学習アドバイス

出題のねらいは次の2つである。

* 異なる分野からの小問集合で、できるだけ広い範囲に渡って全体的な基礎知識・理解を試す。

* テーマに絞った問題の中で、実験の手法や化合物の性質などのより深い理解の程度を試す。

したがって、教科書を中心に据えた学習により、基礎的な知識をしっかりと身につけて、問題集を併用してより深い知識や理解を深めておくことが必要である。また、小問集合では全体的な範囲から、単に知識を問うだけでなく、計算問題やグラフを扱う出題まで見られることから、不得意な分野を作らないことも大切である。

理論化学分野においては、まずは教科書をよく読み基礎的な知識を身につけ、よく理解した上で教科書傍用問題集などを利用して計算問題にも慣れておくことよいだろう。計算問題に意識が向きがちだが、実験器具や試薬の色などにも留意して学習してほしい。

無機化学分野においては、教科書を用いて基礎的な知識を整理していく際、常に周期表を意識するとよいだろう。マーク式の試験ではあるが、しっかりと化学反応式も書けるようにしておく必要がある。

有機化学・高分子化合物の分野においては、苦手意識を持つ受験生も多いと思うが、教科書を中心とした知識を理解、整理し、物質名と構造式をまとめる、異性体をかきだす、簡単な反応経路図を自分でかいてみる、など少し時間をかけた丁寧な学習に取り組むことも必要である。

実際の入試では様々な知識を組み合わせで問われることもあり、難しく感じられることもあるかと思われるが、一つ一つの知識や考え方は教科書レベルのものがほとんどであるから、入試直前の学習では、教科書の知識や考え方を丁寧に確認しながら過去の問題に取り組むとよいだろう。

出題傾向と対策

生 物

＜全体分析＞ ※ 1月24日の問題については分析を記載していません。

	一般入試
試験時間	60分
解答形式	すべて客観式（マークシート方式）
分量・難易度	分量：適当 難易度：基本から標準
大問の構成	一般入試前期日程（1月23日） 第1問 小問集合（空欄補充選択・正文選択など） 第2問 A. 遺伝情報の発現と発生（空欄補充選択・正文選択など） B. 生物の進化（空欄補充選択・グラフ選択・計算など） 第3問 A. ヒトの体内環境の維持（文や図の空欄補充選択など） B. ヒトの体内環境の維持（空欄補充・正文選択） 第4問 A. 動物の反応と行動（文や図の空欄補充選択・正文選択） B. 動物の反応と行動（計算など） 一般入試前期日程（2月3日） 第1問 小問集合（正文選択・図の選択など） 第2問 A. 遺伝情報の発現と発生（空欄補充選択・正文選択など） B. 遺伝情報の発現と発生（図の空欄補充選択・正文選択など） 第3問 A. ヒトの体内環境の維持、動物の反応と行動（空欄補充選択・正文選択など） B. 動物の反応と行動（空欄補充選択・正文選択など） 第4問 A. 生態と環境（空欄補充選択・グラフ選択・計算） B. 生態と環境（空欄補充選択・正文選択など）

出題傾向・内容分析

一般入試（前期日程）

●出題範囲

生物基礎・生物

●出題傾向

生物基礎と生物の両分野の内容からの出題となっている。また、特定の分野からの偏った出題はみられず、様々な分野からバランスよく出題されている。

●出題内容

「生物基礎」からの出題分野

生物の多様性と共通性：生物の共通性としての細胞
呼吸と光合成：光合成
遺伝情報とDNA：DNAの構造
体内での情報伝達と調節：自律神経系と内分泌系
体内環境を調節するしくみ：ホルモンによるフィードバック調節のしくみ
血糖濃度調節のしくみ
免疫のはたらき：適応免疫（獲得免疫）のしくみ
植生と遷移：植生の遷移
植生の分布とバイオーム：バイオームの垂直分布
生態系の保全とバランス：かく乱と生態系のバランス

「生物」からの出題分野

遺伝子の変化と多様性：減数分裂における染色体の分配、遺伝子の組み合わせの変化
光合成：光合成反応のしくみ
DNAの構造と複製：DNA複製のしくみ
遺伝情報の発現：遺伝情報発現のしくみ
発生と遺伝子発現：カエルの発生、外胚葉と内胚葉の分化、中胚葉誘導、形成体の誘導
植物の環境応答：植物ホルモンのはたらき
視覚器：ヒトの眼の構造とはたらき
ニューロンとその興奮：ニューロンにおける活動電位発生のしくみ、シナプスにおける興奮伝達のしくみ
情報の統合：ヒトの脳と脊髄
個体群密度と密度効果：密度効果と相変異、個体数の調査方法、生命表と生存曲線
異なる種の個体群間の関係：種間競争、さまざまな共生

学習アドバイス

本学入学試験は、受験生が基礎から標準レベル相当の学力を有しているかどうかを試すものである。出題のねらいは、

- ① 高校で履修する生物基礎および生物の基礎～標準レベルの内容が正しく理解できているか。
- ② 基礎的な内容の理解を土台とした応用力を身につけているか。

を判断することにある。以下に、上述した①、②に対してどのような対策をおこなえばよいのかを述べていく。

①について

昨今、勉強する際に、参考書ばかりを用いる傾向がみられるが、大学入試のルールブックとなるのは、あくまでも教科書であることを忘れないでほしい。基礎的な内容を理解するために特別なことをする必要はない。まず、**教科書の内容をしっかりと読み込み、理解することである**。高校で履修する生物分野は大きく「生物基礎」と「生物」に分けられており、「生物基礎」教科書のみで学習する分野、「生物」教科書のみで学習する分野、両教科書にわたり学習する分野があるので、どちらか一方の教科書のみでなく、両教科書をそろえて学習することが必要となる。また、本学入学試験では、**出題内容に大きな偏りはみられないため、両教科書の内容をまんべんなく学習することが大切である**。

基本事項を学習するにあたっては、教科書に記載されている内容を、「内容の理解」→「重要事項の暗記」→「暗記事項のアウトプット」の順番でおこなうとよいだろう。とりあえず「重要事項の暗記」をしてから「内容の理解」をする受験生をよくみかけるが、この順番での学習はおすすめしない。理解後に暗記する方が、頭の中に現象がイメージしやすくなるため、短時間で効率よく暗記できるからである。

また、学習するにあたって注意しなければならないのは、**単純な用語のみの暗記に走らないようにすることである**。用語のみを暗記しても、その用語が「何を指すのか、何を意味するのか」を説明できなければ意味がない。具体的な例を挙げると、生物基礎において「内分泌腺」を学習する際に、「甲状腺」や「副腎皮質」などの用語のみをいくら暗記しても、実際の入試において人体の図の中から甲状腺の場所を選ぶ問題が出題されれば、その努力は点数獲得には全く結びつかない。したがって、単純に用語を暗記するだけの学習方法は避けるべきである。

さらに、教科書に載っているような図や写真などが頭の中にイメージできれば、なおよい。教科書にはさまざまな図や写真が掲載されているので、これらを利用するとよい。教科書に載っている図や、高校の授業などで板書を写した図などを、紙などに書き写しながら、何も見なくとも描けるようになるぐらいまでくり返し学習すると、理解とともに点数アップにつながりやすい。図や写真などの情報が不足していると感じるならば、高校の授業などで補助教材に用いるような図説集などを利用するのもよいだろう。

②について

本学入学試験では、非常に難解な応用問題は出題されないので、**特別に難度の高い問題集などを用意する必要はなく、標準レベルまでの問題集で十分である**。高校で補助教材として配布されているような教科書傍用の問題集をもっていれば、これを利用するのがよいだろう。あるいは、書店で販売しているような基礎～標準レベルの問題集でもよい。多くの問題集を揃えるのではなく、決まった問題集を何度もくり返し解くよう心がけるとよい。くり返しているうちに、出題のパターンを覚えると同時に、より短い時間で解けるようになるからである。

また、計算力を鍛えたい受験生は、別途、計算問題だけの問題集をそろえるのもよいだろう。生物で出題される計算問題はある程度のパターンが決まっているので、量をこなしている受験生が有利である。これについても、同じ問題集の演習問題をくり返し解くことで、解くのにかかる時間が大幅に短縮できるはずである。